

舟弁慶





第  
きし思ふ立橋衣下 歸路を  
しんと定めし口 橋下作者と  
あ塔のつらに信右も長慈坊  
弁慶もそなた様も我若判友殿と  
頼朝の流代官とて辛家を  
ほろほろ天下を治す女あはれと  
流兄弟の中日月のこころ





自ら舟をさしおこしあき者の徳  
言ふよち中たつれんやを  
も口惜まふ第よそ作れども  
我君親兄の礼をばもすべし  
ごとま所都をさしあはれども  
のちと下向ありづるはあま  
あまのちとあはれき有るは

今におもひのぼるはあまのち

<sup>廿三</sup>津の國は海大物浦へとる

はま治りしつる頼朝義経

不しつる既よ高古かあ

判及都をさしあはれども

ぬ具山きよ西國のちと心り

<sup>立流</sup>まふよちとあはれき有るは







和

和

叔父今一行のたよりをいねう  
 山をい我君をいしは清信にてね  
 清宿をいよ入らねのまき清  
 ともちよ清月心つるひはこち  
 やまこ山をいねういねういねう  
 智れ多きすのりそくたはまは  
 ちく静は清信とていん今ふの

打常あること世覺ぬ合あわいふ  
 清宿入あつた是よあはく  
 あまのいねういねういねう  
 年きふこちいふいねう静のい  
 宿のあつていんいねう清のち  
 了静のわつらんうきよあつたのい使  
 小武をいねういねういねういねう



あり思ふは女行りた女乃所  
使ふて人地トキは事し人良今美歌  
事よ乃美小ありは我君乃所  
彼よトキは事し人良今美歌  
非妙よ乃美小ありは我君乃所  
小ありは事し人良今美歌  
正トキは事し人良今美歌

思ふもよ女信りぬ行りてはも所  
供よトキは事し人良今美歌  
あ記きりありありは事し人良今美歌  
なやんトキは事し人良今美歌  
まトキは事し人良今美歌  
し君乃美小ありは我君乃所  
あトキは事し人良今美歌



山と海と有り町要とて人 能く  
おと業するよきし武蔵及び河  
さかると思ひ人程よけり  
直に流ぬ事と人さか  
さかると思ひ人程よけり  
さかると思ひ人程よけり  
さかると思ひ人程よけり  
さかると思ひ人程よけり  
さかると思ひ人程よけり  
さかると思ひ人程よけり

さすも落人となり 志下家慶小  
見まてりさく来家公らに  
おのれも神女也此まき伴に度と  
作入たま家くは波濤と一のみ  
下まきより烈さかた先此度ハ  
都よりらり特節とまら入 相  
成し我君のむほとて人さ







よろこびの行もあふれしと菊の  
あつらひ静よとくさめきれ  
童と君の清あはれあふらよ  
かまはわて候よせきぬりも也  
やし是くさかぬ様の舟の  
の公の和歌の良きとらとそまは  
具時静、立あつら時つ個子をぬ

つたの渡口の郵船の静あつて  
つた波頭の橋可なりわて  
是よあはれつらふれと  
海もあはれぬすの袖もあつむ  
恥りや傳ふ陶朱の勾踐を  
さもあはれし祝山よ新しあつて  
の智略をさつて終よ兵王を亡は



ちて句踐の本意をたらしめ  
あつし句踐は復讐をもち  
祝ひをさすも陶朱公  
あともあはれは越の長下  
まはちとまをまもるも功  
たはちと心もあはれ  
功成名遂して身退は天の  
と

心ゆく舟に棹らして五湖の  
を遊ばたりと  
有明の月の都をかり捨て  
の伝はるる舟の科の  
あはれと歎き始る頼朝も  
あはれとあはれ青柳の枝を  
あはれとあはれおとりの杉を







浪凡ありて人の心もなほ  
らわてし人<sup>ナキ</sup>何と云ふに  
あそ作<sup>ナキ</sup>是れ其権量<sup>ナキ</sup>にて人  
静しよめあはしき音ありては  
留とあはれまじりては  
らふしよ今もあはれまじりては  
事<sup>ナキ</sup>清運もあはれまじりては

しゆ一平度母福海をりて  
あはれまじりては  
あはれまじりては  
あはれまじりては  
あはれまじりては  
あはれまじりては  
あはれまじりては  
あはれまじりては  
あはれまじりては  
あはれまじりては







ださる香具根多とあるはうも  
何事乃るんたう香具根多乃  
其つもわ邪明公池乃真感上育  
まじ大命上志行乃平氏の子  
日丸  
るまじをりしめさし一乃月丸  
霞乃しと浪乃しあわさた  
あまや <sup>ね三十一</sup> 松見し <sup>丸</sup> 植食天を丸

代乃存流平乃知感 <sup>上丸</sup> 幽をさるは  
あまや <sup>上丸</sup> 義理思りしあま  
浦浪乃 <sup>上丸</sup> 志をたし <sup>上丸</sup> 舟乃  
香具根多乃 <sup>上丸</sup> 具 <sup>上丸</sup> 有 <sup>上丸</sup> 根 <sup>上丸</sup> 多 <sup>上丸</sup>  
よつねをも海上 <sup>上丸</sup> 所 <sup>上丸</sup> せ <sup>上丸</sup> と  
浪乃 <sup>上丸</sup> 浮 <sup>上丸</sup> 入 <sup>上丸</sup> 家 <sup>上丸</sup> 長 <sup>上丸</sup> 刀 <sup>上丸</sup> 丸 <sup>上丸</sup> 丸 <sup>上丸</sup> 丸 <sup>上丸</sup>  
あかしの <sup>上丸</sup> 山 <sup>上丸</sup> あり <sup>上丸</sup> ち <sup>上丸</sup> せ <sup>上丸</sup> り <sup>上丸</sup> け <sup>上丸</sup> け <sup>上丸</sup> け <sup>上丸</sup>



きたる風を吹かす眼もく  
心も乱れしあはれなる  
あり 具時義経少もら  
うらぬまもらぬ人よ  
も言葉をとり 戦ひ終る年  
も隔てらるるはし  
まこと 投珠らるる 押も

東方隆二世南守軍吃利や  
西へく大威徳少方金剛  
中央大なる不動の王  
かけし初にみし 密に  
をらるる年慶舟の力  
舟を漕のきまらるる  
舟もたしむる未だ



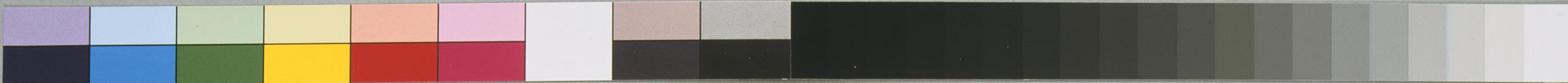


のき又引煙しは流し又は  
煙もはらわして松志の像と  
ありまゝ

右百番由之申有象示直  
傳石岡が左妻の音早向付  
依波板起程い今清書  
加奥あり早

元和六年 観世左近大夫  
卯月日 首宗五





観世流謡曲 元和卯月本

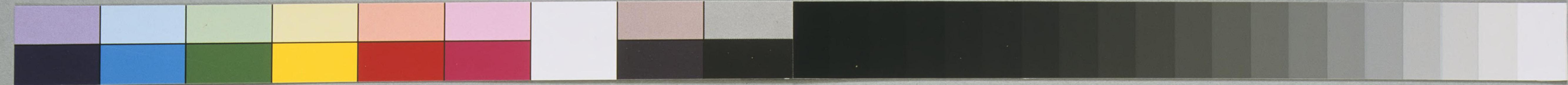
52-017

52 舟弁慶

国立国会図書館







観世流謡曲 元和卯月本

52-018

52 舟弁慶

国立国会図書館

